

週日の説教

金 大烈 神父 2010年3月9日(火)

《人を赦せる心》

面白い話をしましょう。

あるタクシーの運転手さんが、その日はお客さんがいなくて困っていました。ずいぶん長い間待ってから、やっとお客さんが来ました。運転手さんは、気分よく「どこまで行かれますか？」と聞きました。しかし頼まれたのは、そこから1キロメートルも離れていない場所でした。運転手さんは少しがっかりしましたが、“親切にしなければいけない”と思い、お客さんから頼まれた場所へ行きます。するとそのお客さんは、車が入りにくそうな細い道をもう少し先まで行ってほしいと言います。運転手さんは、車が入れないのではないかと心配しながらも頼まれたとおり道を入りました。そして数百メートル先で止まりました。金額を伝えると、お客さんは財布の中を捜し、「細かいお金がなくてすみません。」と言いながら1万円札を出しました。そのお客さんのタクシー代は300円くらいでした。運転手さんは、「申し訳ありませんが、お釣りがありませんので細かいお金はありませんか。」と聞きました。すると、お客さんは機嫌を悪くして「ありません。」と返事をしました。運転手さんも機嫌が悪くなり、意地悪な気持ちになります。

そこで、近くの銀行で、1万円札を全部1円玉に交換しました。「1万円札もお金なら1円玉もお金でしょう。」と言いながら、お釣りを全部1円玉で返したのです。そして「勝った！」と思いながらお客さんが降りるのを待ちました。しかしお客さんはなかなか降りようとしません。「お客さん、もう着いたのですから降りていただけませんか。」と言うとお客さんは「待ってください。私はお釣りを数えなければなりません。あなたが話しかけたから、いくらまで数えたか忘れてしまいました。また最初から数えなければなりません。」と言って、一円、二円、三円・・・と数え始めました。

もうひとつ、面白い話をします。

ある司祭が、友達の司祭のところへ赦しの秘跡を受けに行きました。赦しの部屋に入ると、赦しを授ける友達の司祭はいたずらをしたい気持ちになりました。そこで「償いとして、十字架の道行を行いなさい。ただし、普通の十字架の道行ではなくて、1留ごとにロザリオを1環捧げなさい。」と言いました。1留終わるごとにロザリオを1環祈っていたら、なかなか進まなくて大変です。しかし償いですから、その通りにしなければなりません。赦しを受ける司祭は、「分かりました。」と言って、1留終わるとロザリオを1環祈り、また1留終わるとロザリオを1環祈って、やっと全部済ませました。そして、こんな大変な償いをさせた友達の司祭にいつかお返しをしようと思いました。

そして別の日、今度は逆にその友達の司祭が来て、赦しの秘跡を求めました。そこで、「償いとしてロザリオの祈りを捧げなさい。ただし、1珠繰るごとに十字架の道行を1まわりしなさい。」という償いを授けました。皆様どうでしょうか。「恵みあふれる聖マリア・・・」と祈るたびに十字架の道行を

1まわりです。

笑い話でしたが、今日の福音(マタイ 18・21-35)は、私たちカトリック信者ならばいつも意識しなければならない話ですよね。「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。」「あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」そして、私たちが毎日捧げる『主の祈り』の中でも同じことが結論として話されていますね。

しかし、私たちは赦すことが苦手です。苦手ではないと言う人でも、赦すべきことにぶつかったときに赦せません。私たちは、そういうところを持っています。

今日の話はこのような笑い話ですが、結論は苦いです。このようなことに対して、信者である私たちには信者でない人々と違うところが必要ですよ。もし、“赦せない”と思う人を赦せる心が私たちにあったら、やはりお互いに救われるのではないかと思います。私たちは、そのような心を何よりも求めなければならないのではないのでしょうか。

ありがとうございました。

ミサ後の話

信仰がそれほど深く根を下ろしていないときには、『赦されなければならない心』より『赦さなければならない心』のほうが大きいです。しかし、信仰生活をしっかり行えている人々の特徴は、自分が赦すことより、自分が赦しを求めなければならないことのほうが多いことです。

皆様もこの基準を通して振り返ってください。皆様の今の状態はどうでしょうか。『赦さなければならない人』と『赦してもらわなければならない人』とどちらが多いでしょうか。それを考えると、今自分の立っている位置がはっきり見えます。